



東地中海地域ニュース

イスラエル：ヴィノグラード委員会最終報告

(1月31日付現地各紙)

2006年の第二次レバノン戦争について、政府や軍の対応を調査していたヴィノグラード調査委員会が、1月30日に最終報告書を発表した。同報告書は、2007年4月に中間発表をした際、政府の行動を厳しく非難していたこともあり、報告書の内容次第では、オルマート首相の首相退陣もありうると目されていた。以下は、政界の反応と現地各紙の報道振り。

1. 政界の反応

- (1) オルマート首相は、最終報告の中でも特に注目された、停戦の60時間前に開始された大規模な地上作戦に関して、何らかの軍事目標を達成し得なかった一方、作戦を承認した判断は事実上不可避であったとするヴィノグラード委員会の報告に対して「やっと正義が明らかになった」と述べた。
- (2) オルマート首相及びカディマの一部の議員は、労働党党首のバラク国防相に対し、政権から離脱しないように呼びかけた。だがバラク国防相が政権離脱することはないが、報告の批判を反映するような早期選挙の実施などの代案を考慮していると述べた。
- (3) 野党のリクードは、オルマート首相は辞任すべきで、バラク労働党党首は、自分の公約を履行し、政権から離脱すべきであるとの声明を発した。

2. 報道各社の反応

- (1) イェディエット・アハロノット紙（エイタン・ハベル論説委員及びバフム・バルネア記者）
報告から最も学んだことは、イスラエル国防軍（IDF）の惨状である。この報告書は、イスラエル建国以降、ヨム・キプール戦争（第四次中東戦争）に関する報告以上に最も厳しい内容となった。しかしなぜそもそもこの戦争を行ったのかについて報告書は一切答えていない。
- (2) ハアレッツ紙（ヨッシー・ヴェルテル記者）
今後の政局として、オルマート首相のライバルは、オルマート首相を辞任させるために、この報告書で責任を追及するだろう。他方、オルマート首相の支持者は、オルマート首相が考えているように新しいページを開く機会として、今後も政権にとどまり、修正を要求するだろう。

(3) ハアレッツ紙（アキヴァ・エルダール記者）

オルマート首相は、リバニ外相を沈黙させるために、「和平プロセス」という玩具を与えた。「和平陣営」の支持を得るために、オルマート首相は、リーバーマン副首相及びイスラエル・ベイティヌを連立に引き留めることを諦めた。シャス党を政権内に留まらせるために、オルマート首相は、エルサレム問題を実際の交渉の枠外に置くことを約束した。

(4) マアリブ紙（ベン・カスピット記者）

バラク国防相は、今回の報告を「明確なグレー」の色に喩えた。それは、報告が政権を倒してネタニヤフ・リクード党首を政権に持ち上げるほどには十分ではないことを意味する。他方バラク首相は、今後公約を履行しなかったとしてほとんどの批判を受けることになる。

<参考>

最終的に発表された報告書は、イスラエル軍には厳しい立場を取ったが、オルマート首相については、予想されたほどの厳しい評価はなかった。そのため、オルマート首相の早い時期での辞任の可能性は消えた。連立政党の柱である労働党も、当面は連立に留まるため、首相辞任あるいは連立政権崩壊の事態は当面回避された。ただ、オルマート首相の人気は、依然低迷している。早期選挙があるとすれば、2008年末から2009年初めとの見方がある。次期選挙をにらんで政局が動けば、オルマート首相・カディマ党首の立場は流動的なものとなる。